慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アルクインのこと([英]Alcuin [羅]Alcuinus [Albinus] Flaccus)735?-804
Sub Title	ＡＬＣＵＩＮ (Alcuinus (Albinus) Flaccus) 735?-804
Author	田中, 克佳(Tanaka, Katsuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1993
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.36 (1993.) ,p.113- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	30周年記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000036-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルクインのこと ([英] Alcuin [羅] Alcuinus [Albinus] Flaccus) 〈735?-804〉

田　中　克　佳*

Katsuyoshi Tanaka

In this paper I have tried to introduce Alcuin an Anglo-Saxon, who assisted Charles the Great through his effort to give rise to arts and educatin in the period of the carolingian renaissance, by translating into Japanese of "ALCUIN AND THE RISE OF THE CHRISTIAN SCHOOLS", 1893, London (by West, Andrew Fleming [1853-1943. American educator; professor of Latin [1883-1928], Princeton.]).

A summing-up of West on their work is as follows:

"(revival of learning) under Charles and Alcuin is (—) of vital importance as a first stage in the evolution of modern education. Narrow and technical as was the instruction given, and brief as was the duration of the institutions founded, it still remains true that Charles was the first monarch in the history of Europe (—) to attempt an establishment of universal gratuitous primary education as well as of higher schools. Moreover, as the result of Alcuin's organizing sagacity, a body of men devoted to teaching as well as learning was created, giving some degree of continuity to education down to the founding of the universities and so sheltering studies in various monasteries and cathedrals that some of the greater schools thus kept alive, or offshoots from them, afterwards became natural receptacles for the new university life of the next age." (pp. 2-3)

はじめに

フランスの中世史家 J. ブウサールは，その著『シャルルマーニュの時代』の結びの部分で「カロリング時代は，人間性（ユマニテ）の歴史における主要な時期であり，したがってその研究は中世史家にとって，多くの問題をとく鍵になる。（略）カロリング時代の第一義的重要性は，文化の領域にあった。学問や文芸の教養は，何よりもまず聖職者の教育を目ざす教会的教養にとどまっていた。しかし，すでに見たように俗人もまた広汎にその恩恵をうけており，宗教的教養を基礎としたところの俗界の教育復興でもあったのである。（略）〔カロリング・引用者〕ルネサンスは古代文化の足跡を滅亡から救い出し，全中世の糧とし，そして中世を介して近代をも育んだのである。シャルマーニュがこの事業に寄与し，あるいはそれを推進した役割については，過大評価ということは決してあり得ない。」[1] と述べている。

本稿は，このシャルルマーニュ〔佛〕（後述の West は，「チャールズ」で叙述）に力を貸して学芸や教育の復興に尽力したアングロサクソン人アルクインという人物について，名著の評価の高い West, Andrew Fleming (1853-1943. American educator; professor of Latin [1883-1928] and dean of graduate school [1901-28], Princeton.——Webster's Biographical Dictionary) の手になる "ALCUIN AND THE RISE OF THE CHRISTIAN SCHOOLS", 1893, London によって，翻訳・紹介を試みるものである。

アルクイン研究の資料的側面について，West の叙述を引けば，次のようである。

「アルクインの著作は，かなり完全な状態で私たちの時代に至るまで保存されてきた。それは 4 つの部門に分

* 慶應義塾大学文学部教授（教育学）

類することができる。最初にくるのは，彼の神学に関する作品であり，彼の全著作のうちの大部分，おそらく三分の二を含んでいる。(略) 残りの三分の一のうちの主要部分は，彼の書簡のうちに含まれ，その残余を構成する教授学的論文と詩は，量的に最もわずかである。

そういうわけで，アルクインの大部分の著作には，教育の歴史に関わるものがほとんどないように見えるが，それでも彼の神学に関する作品でさえ，この点で付随的な重要性をもっている。(略) 書簡は，当時の一般史を知るために，またもっと特殊的には，学校で学ぶことの復興に関わるアルクインの活動を明らかにするその豊かな光のために高い価値を有している。詩は，比較的価値が少ないけれども，アルクインがそこで育てられたヨークの学校の歴史を知るのに，またフランク王国での彼の後半生を知るのに重要な手がかりを含んでいる。しかし，何といっても第一の関心は，とくに彼の教授学的著作に集中する。というのは，それらの著作には，自由学芸のうちのあるものについての個別的論文の場合と同様に，教育に関する彼の一般的見解が，まことにたっぷりと含まれているからである。」(pp. 89-90)

さっそく，本論に入ることにしよう。

1. アルクイン誕生前夜

① 学問と教育の時代背景とチャールズならびにアルクインの位置

「古代史と近代史の中間にある (略) 15 世紀間における教育の運命は，西洋文明の相つぐ局面を特徴づける時期々々の性格とよく一致している。チャールズ以前に二つの時期が画される。一つは，西暦紀元の最初の 4 世紀間にわたる時期であり，それは，ローマ帝国の学問のための学校の衰退と，時を同じくしてのキリスト教の興起によって特徴づけられる。もう一つは，以後のほぼ 4 世紀間にわたる，混乱と蛮族の侵入と学校の死滅，そして知的暗黒の行き渡った時期である。ついで 8 世紀末のチャールズの時代に，第三の時期が始まる。それは，その始まりにおいて中世紀最初の一般的教育施設の設立によって特徴づけられる時期であるが，ただこの施設は，ほんの一，二世代存続しただけで，蛮族のヨーロッパへの新たな侵略とともに荒廃に帰してしまうことになる。この時期は，間違いなく 11 世紀まで継続したが，この 11 世紀に，中世の第四の，そして最後の時期が，スコラ学の影響による学問の第二の復興とともに始まり，大学を創設したけれども，それ自身は，結局，学問復興のあの第三の，そして最後の時期となる，そして教育における私たちの近代の始まりを画するほどに根源的で強力であったルネサンス期に，衰退し，終焉を迎えることになる。

以上は，西洋における学問復興の三つの時期である。(略) チャールズとアルクインの時代の最初の学問復興は，近代教育の進化の最初の段階として，なおきわめて重要である。与えられた知識は狭く，かつ特殊で専門的なものであり，設立された機関の存続期間は短かったとはいえ，それでもなおチャールズが，(略) ヨーロッパの歴史における高等の学問の設立だけでなく，普遍的な無料の初等教育の設立を試みた最初の君主であったことは間違いない。さらにアルクインの，組織者としての賢明さの結果として，学生の団体だけでなく教師の団体が創設され，それによってある程度の教育の継続性が与えられ，ついに大学の創設にまで至るわけである。またさまざまの修道院や司教座聖堂での研究も大いに保護されることになった結果，比較的大きな学校のうちには存続し続けるものもあり，あるいはそこから分かれ出たいくつかのものは，成り行き上当然に，次の時代の新しい大学生活の行われる場所となった。」(pp. 1-3)

② 上記第二期の「知的暗黒の行き渡った時期」に維持された自由学芸リベラル・アーツ(古典古代の遺産)の実態

「自由学芸の創始者たちの系譜 (略) のうちボエティウス,[2] カッシオドルス,[3] およびイシドール[4] は，学校における一般に承認された典拠となった。一方マルティアヌス・カペラ[5] の方は，当初一般の承認を得られなかったものの，大きな影響を与えた点では同様であった。彼らが譲り渡した学問は，古代人の学問の体系的提示という高みに達するものではなく，せいぜい，不完全に仕上げられた，またしばしば誤って変容された古代人の学校の教科の一般的概要を含んでいるにすぎないものであった。彼らが中世に伝えたものは，ほんの数冊の書物に納められ，またこのわずかな蓄積が，ルネサンス期まで完全には取って代わられることもなく，実際上，8 世紀までの教授の全内容を構成したということは，明確に主張することができる。イシドールは，そのリストの最後に位置して，西ヨーロッパにおいて，学問だけでなく文明社会をも消滅させつつあった野蛮状態の只中で，キリスト教学校の学問の発展に最後の幕を引くのである。彼の時代以後一世紀以上にもわたって続いた暗闇は深部におよび，かつほぼあまねく行き渡った。ローマ自体が，野蛮国になっていた。」(p. 27) (註番号は引用者)

③ この間，学問の灯は，ブリテン島とアイルランドにおいて守られた。

「イシドール以後チャールズ大帝の時代に至るまでの時期の大陸の暗黒は，学問が，アルクインに伴われてヨーロッパに戻ってくるまでの避難所をそこに見い出したアングロサクソン教会の輝かしい知的傑出と，時期的に符号している。キリスト教は，一緒に自由学芸という貴重な宝を伴なって，多くの扉を通って，また幾度となくブリテン島に入っていた。ゴールの地中海海岸のはずれにあるレリンスにある大修道院から，聖パトリックが宗教をアイルランドにもたらしていたし，彼に続く他の修道士たちは，当時ゴール人の学校で栄えていた神聖な学問だけでなく，世俗的学問まで持ちこんだのであった。(略) アリストテレス，キケロ，ヴァージル，プラウトゥス，ヴァロ，およびフロントが知られ，学ばれた。また危険人物マルティアヌス・カペラは，自由学芸の好手引きであった。鋭敏で思索的なアイルランド人精神は，そのような教えに接した時，容易に心を動かされ，これに応じたのであった。」(pp. 28-9)

2. アルクインのこと (1)

① 師匠たち——生育の環境

「このアイルランドの学問が，7 世紀に，今度は北部ブリテン島のアングロサクソン王国であったノーサンブリアに伝わった。南部へは，グレゴリウス大教皇（聖グレゴリウス一世）が，南部の中心地カンタベリーを手始めにブリテン島をキリスト教に回宗させるために，596 年に熱心な修道士のアウグスティヌスを送りこんでいた。同地にタルススのテオドールがやって来たのは 669 年のことであるが，じきにその地の最初の大司教となった。この厳格で有能な牧師は，アングロサクソン教会にローマ風の規律と組織を大きく刻印することに成功した。しかし彼は，ローマ教皇の影響力の決然たる助成者であったとはいえ，なお生まれながらのギリシャ人ともいうべき人物であったから，彼の庇護の下にギリシャの学問が，カンタベリーに導入された。北部には，ウィーマウスとヤーローの双児の大修道院が建てられて，レリンスやその他の大陸の修道院からもたらされた，またローマ自体からさえもたらされた書物が豊かに備えられていた。この修道院の高貴な創立者のベネディクト・ビスコップ (628-690) もまた，その大修道院長となった。彼の最も偉大な生徒がベーダ (673-735) であったが，ベーダは，7 歳からベネディクトの下で教育を受け始め，ベネディクトの後継者のクールフリスの下でそれを継続した。彼は，そこで，おそらく『当時のヨーロッパの他の場所では見い出されえない有利な機会——当時西洋に存在した学問の情報源の一切に接近するまったくうってつけの手段——を享受した。そこ以外の場所では何処でも，彼は，アイルランドの学問，ローマの学問，ゴールの学問，ならびにカンタベリーの学問，あるいはベネディクトがローマとヴィエンヌ（訳注・フランス南東部）で買い求めていた書籍の集積を，あるいはアイルランドの修道院からだけでなく大陸にある修道院からも入手された規律についての知識を，同時に手にすることはできなかったであろう。』(略) しかしベーダは，受容性に富んではいたが，保守的であった。(略) 彼は，寓話風な話し方をしながらも，マルティアヌス・カペラのような，とんでもない突飛さに陥らないですむことができた。(略) 彼の最も親しい友人の一人がエグバートであった。エグバートは，732 年にヨークの大司教となり，その地に司教座聖堂学校を建て，優れた蔵書によってこの学校の意義を高からしめた。34 年間にわたる彼の支配は，学問のためにかけがえのない貢献をした。彼のスコラスティクス scholasticus つまりこの学校の教師，であったエルバート（エセルバート）は，彼の寛大な政策を実行し，後に大司教として彼の後を継いだ。この学校で彼らは，この学校の最も偉大な生徒となったアルクインを訓練したのであった。」(pp. 29-31)

② ヨークのアルクイン

「アルクインは，ノーサンブリアの貴族の家系を引いた。彼の出生の日付と場所については，よく分からない。しかし彼が，735 年頃，またその人生の初期をすごしたヨークの近くで生まれた可能性は，ひじょうに高い。まだ小さい子供であったころ，彼は，エグバートによって建てられた司教座聖堂学校に入り，フランク王国に出かけるまでの間，一学徒として，また後には教師として，その地に留まった。(略) 彼は，まず読み・書きとラテン語の詩篇の暗誦を教わり，それから文法と他の自由学芸の初歩を，また後には聖書の知識の教授を受けた。(略) アルクインは，やがてその学校の最も卓越した生徒になり，またエルバートの助教師となった。766 年エグバートが死に，エルバートが大司教の職を継ぐと，今度は，アルクインがその学校の校長としてエルバートの後継者となったように思われる。ともかく彼は，その時，助祭つまり「レビ人」に任命され，その後しばらくスコラスティクスの職についた。(略) 780 年にエルバートが死ぬと，彼は，そこの司教座聖堂の図書館——当時ブリテン島で最も有名で，キリスト教世界で最も有名な

ものの一つであった――の管理を任された。彼は，そこに集められていた主要な書物について一種の韻文の目録を，彼の詩の一つに記録している。(略)

(略) 当時の著名な教科書のうちカッシオドルス，ボエティウス，およびベーダを所有している。古典古代の中では，アリストテレスとキケロの一部，詩人のヴァージル，スタティウス，およびルカス，それに文法家のドナトスとプリスキアヌスを，主要な著作家として所有している。その図書館にはローマ・カトリック教会の教父たちもまたあった。彼らのうち，アウグスティヌス，ヒエロニムス，アンブロシウス，およびグレゴリウス大教皇の本があった。(略) タルススのテオドールが，カンタベリーにギリシャ語教授を生じさせ，ついで彼の影響がヨークにまで及んだこと，またアイルランドの影響はギリシャの学問に好意的であったから，ヨークの図書館にはおそらくギリシャ語の本があったことは確かである。しかしアルクイン (略) 自身の文芸の探究は，古代ローマに限られていた。したがってアリストテレスやギリシャの教父のうちのあるものが彼のカタログに現れるとはいえ，彼がラテン語訳のものだけしか考えていないことは，十中八九確かである。彼が利用しているアリストテレスは，すべて，ボエティウスか，誤ってアウグスティヌスのものとされている論文『範疇について』の中に見い出されるものである。彼の一般的な教授科目は，伝統にしたがって，古い権威者たちであるボエティウス，カッシオドルス，イシドール，およびベーダに依存している。ボエティウスやカッシオドルスでさえ，利用されているというよりはむしろ賛美されており，したがって彼が実際に依存しているのは，他の2人である。たとえマルティアヌス・カペラがヨークの図書館にあったとしても，その事実への言及は，まったくなされていない。

この学校の校長としてのアルクインの名声は，大きなものであった。彼は，生徒たちに，自分が受け取った学問を伝え，またエグバートによって教え込まれた自由学芸へのあの学習意欲を吹き込んだ。彼は，学問の心もとない境遇について十分に承知しており，この事実を生徒たちに銘記させたのであった。(略) 多くの人びとが，彼の話を聞くために参集し，やがて彼は，ブリテン島で最も著名な教師となった。」(p. 31/pp. 33-38)

3. アルクインのこと (2)

① フランク王国の諸情況

(「フランク王国に学問を確立する目的をもって居を定めるよう」(p. 39) チャールズ大帝に招じられて，アルクインがアーヘンに到着たのは，782 年のことである。)

「この時期のフランク王国の学問の状態はひどいものであった。初期のゴール人の学校からフランク人の教育に何とか伝わったどのような伝統もが，メロビング王朝の王たちの時代を特徴づける野蛮な無秩序の中で，ずっと以前に四散し，跡形もなくなっていた。以前に栄えていた修道院学校および司教座聖堂学校は，その時期に急激に中断されていたし，修道院自体がしばしば住居として国王の寵臣たちに与えられ，こうして神聖な用途から野蛮な用途へとすっかり変っていたのである。書物の書写はほとんど行われなくなっており，またこの時期に文学の名を自負するものはといえば，退屈な年代記か無知のために信じこまされていた伝説だけである。廷臣用の基礎教授センターであったいわゆる宮廷学校は確かに存在していたけれども，ここにおいてさえ学芸は，宮廷生活の付属物の一つとして，きわめて取るに足りない役割を演じていたにすぎない。(略) (782 年チャールズは) アルクインを迎えて，復興された宮廷学校の校長に任命した。この年から 8 年間 (782-790) に見られることは，最初宮廷学校という比較的狭い領域で，ついで彼の王国全域で，高等の学問と一般的基礎教育の両方の振興を計るアルクインの教育計画を，彼が間断なく推進したということである。」(pp. 40-42) (一部カッコ内引用者)

② 宮廷学校長としてのアルクイン (782年-796年)

アーヘンの宮廷学校の生徒たちには，次のような人びとがいた。

チャールズ大帝，女王のリュートガード，チャールズの 4 人の姉妹の一人ジゼラ，3 人の王子たち (チャールズ，ペピン，ルイス)，娘たちのうちの 2 人 (王女ロトラド，妹のジゼラ)，女婿のアンジルバート，従兄弟のアデルハードとワラと彼らの妹のガンドラダ。これら王家のメンバーに加えて，王の親友で後の伝記作家エインハード，後のマインツの大司教リカルフ，後のザルツブルクの大司教でアルクインの最愛の友アルノー，後のオルレアンの大司教テオドルフ (pp. 24-43)。

「彼の教授は主として質疑応答によって行われ，しばしば質問の答もアルクインが等しく前以て準備したこと，また最初に質疑応答の内容をなしたものが文法であったことは確かである。しかも彼は，それ以上に，『算術ヵ原』の遠足に出かけ，また天文学・修辞学および弁証法に分け入ったのであった。したがってこの宮廷学校は，まもなく高等の学に従事するための王領地内における一中心地となった。」(p. 45)

③ チャールズの教育に関する一般教書とアルクイン

「チャールズは，787 年に，かの有名な法令，すなわち布告を出した。それが，中世教育の最初の一般教書である。それは，様々の修道院の大修道院長宛の書簡の形式をとって，彼らの読み書き能力の欠如を責め，彼らに『学問することを粗略にしないだけでなく，彼らみずからそのことに忍耐強く力を注ぐこと』，またとくにこの偉大な仕事のために『学習能力があり，かつ喜んで学習し，さらに他の人びとに教授する意欲をもっている人びと』を選出することを強く勧めている。(略) それは，今日まで保存されてきた唯一の謄本——フルダの大修道院の院長であったボーガルフに宛てられた謄本——には，次のように書かれている。

『神のみ恵みにより，フランク族ならびにロンバルト族の王としてローマ人のパリキウス（訳註・爵位）たるチャールズより，大修道院長ボーガルフと彼の全会衆ならびに彼の保護に委ねられた信徒へ:

『信徒との連帯において我らが有益と判断せしことを，神の御意にかなおうとする皆の信心の努力の記憶するところとせよ。すなわち，神の御寵により我らが保護に委ねられた司教管区および修道院に，常の生活習慣と聖なる宗教に合致したる生活習慣だけでなく，学問すること——各人がみずからの能力と神の御加護に応じて学問を教えかつ学ぶこと——も存在するべく配慮されるべきであるということを。何となれば，家の規則を然るべく遵守することが善き素行に導くがごとく，教えある者と教えを受ける者によって示された熱意が文章に秩序と優美さを与えるからであり，また正しく生きることにより神の意に叶おうとする者は，正しく話すことにより神の意に叶うことも怠るべきではないからである。『汝は，汝みずからの言葉によって義とされ，あるいは罪とされん』と記されている。また正しい行為は，正しい話し方に勝るとはいえ，何が正しいかの知識は，正しい行為に先行する。それ故誰もが，みずから進んで成し遂げようとすることがどのようなことなのか，理解しようと努力すべきなのである。そしてこの正しい理解は，言葉の話し方が誤りを免れれば免れるだけ，それだけ早く獲得されることになるであろう。それにもし誤った話し方はすべての人びとが避けるべく努力すべきことであるならば，とくにそれは，真理の下僕たることを選んだ人びとによってこそ，努力されるべきである。過去数年にわたって，我らはしばしば様々の修道院から，彼らの聖なる勤行に際して兄弟たちが，我らのために祈りをささげたことを報じる手紙を受け取ってきた。そして，これらの手紙に示された所信が，それ自体は誠にもって正当なものでありながら，ぎこちない用語で表明されていることを観察してきた。すなわち敬虔なる信心が，我らのために祈る心を命じたわけであるが，教育のない舌は，そのような心情を正しく表現することができなかったのである。ここから我らが胸に，もし正しく書く能力が，かくのごとく欠如しているものとすれば，聖書を正しく理解する力もまた，ふさわしいどころの話ではないのではないかという恐れが生じたのである。周知のように言葉の上での誤りが危険だとはいえ，理解の上での誤りは，なおもっと危険である。それ故我らは，皆に，学問することを怠らないだけでなく，そのことに忍耐強く，かつ神の意によく叶うかの謙虚さをもって，力を注ぐことを強く勧めるものである。さすれば，皆も，大いなる容易さと確実さをもって聖書の奥義を洞察することができるであろう。何となれば，聖書には比喩・言葉の綾・似たような比喩的表現が含まれているが故に，これを読む者は，学問の教授をよく受けていればいるだけ，はるかにより容易にその宗教上の意味に到達することには疑問の余地がないからである。それ故この仕事のために，学習能力があり，かつ喜んで学習し，さらに他の人びとに教授する意欲をも有している人びとを選出してもらいたい。そして彼らに，我らが彼らに勧める熱心に匹敵する熱意をもって，その仕事に力を注がしめよ。

『我らが願いは，皆が，教会の戦士がそうあらねばならぬ者——心は信仰厚く，話に学があり，行いは清く，語るに雄弁である者——であり，それ故にイエス・キリストの御加護を求めて，あるいは信仰生活の美点を目にするために皆の家に近づくすべての者が，皆を見ることで高められ，皆の話や歌を聞くことで教化されて，至高の神に感謝をささげつつ家路につかんことを，ということである。

『汝が我らが愛顧を尊重する限り，必ず汝のすべての属司教たちならびにすべての修道院にこの書簡の写しを送付せよ。また僧侶の一人をも，自分の修道院の範囲を越え出て裁きを行い，あるいは会合に加わり，投票所に入ることのないようにせよ。さらば。』」(pp. 49-51)

「声はチャールズの声であるが，手はアルクインの手である。力強い，命令口調は王自身のものであるが，説得力ある話し方を工夫し，それをこれほどまでに完全に学問の伝統の型にはめ込むことは，もし師匠の手助けがなかったらば，王には決してできなかったことである。(略) (この法令の注目に値する第一点は) 教育への一般的世話を強いる，またとくに教会が学問の学習を維持す

るように留意する，国家の権利を当然のこととする考えである。注目に値する第二の観念は，世俗的な学科の当然の教授・学習なしには，教会の下僕たちは，彼らに固有の職務遂行が不可能であり，聖書の理解力に大きな阻害要因をもつことになるであろうとする考えである。(第三点は) 修道僧と牧師の学問の訓練と，さらに教育という偉大な仕事を不朽なものにするための教師——「学習能力があり，かつ喜んで学習し，さらに他の人びとに教授する意欲をも有している人びと」——の団体の育成の両方を主張している (ことである)。」(pp. 52-3/カッコ内引用者)

「この法令の実際的効果を明らかにする当時の記録が，ごくわずかしか残っていないことは遺憾である。それでも，それが概して服従されたことを疑う理由はまったくない。またあちこちに学校制度についての，また学問を拡張し，強化するためのさらなる王の命令についての証拠がないわけではない。(例証，略)」(pp. 53-55/同前)

「以上の，およびその他の，散在する通達を通じて私たちは，王の考えがどの程度まで理解されたかについて，また創設された学校の性格についてもある程度の見解を組み立てることができる。初歩的教授のための普遍的規定が熟慮され，ある程度まで実施された。そしてテオドルフにおいて始めて，初歩的教授の無償の原則の主張が見られる。(略) しかしながら，チャールズ (に) 義務教育組織についての考えは，(略) よぎらなかったようである。それは，近代まで留保されたのであった。」(pp. 55-56)

④　チャールズとアルクインの手になる教育組織 (「創設された学校の性格」)

「チャールズとアルクインによって不完全ながら組織された教育に，三つの進歩の段階もしくは水準を識別することができる。彼らによる学校階層制の頂点に位置するのが，宮廷学校，つまり厳密には拡大解釈された意味での大学である。この下に，またそれへの準備としてある種の修道院学校と司教座聖堂学校の中等段階の教授がある。一方初等教育は，修道院学校や司教座聖堂学校にも見い出されるが，村の学校でもっぱら教授される内容が，初等教育である。」(p. 58)

これらの学校についての説明は，次のようである。

「宮廷学校は唯一つしかなかった。それは，文化の主要な中心であり，きわめて萌芽的な学術アカデミーであったが，さらに当時の教育の頂点にして中心であった。(略) 修道院学校ならびに司教座聖堂学校は，初歩的教授と，場合によってはより上級の教授を与えることがあったが，これに対して村の学校は，純粋に初歩的なものであった。村の学校の校長は教区牧師であった。修道院学校の校長は大修道院長であり，彼は，自分の聖職序列の長に対する責任を負い，したがってローマに対して責任を負った。司教座聖堂学校の校長は，司教区の司教によって任命されるスコラスティクスであった。司教もまたローマに対して責任を負った。しかし修道院の大修道院長は，修道院への司教たちの側の管理権を承認しなかった。そしてこのことが，司教がそのような管轄権を行使しようとするたびに，しばしば衝突へと導いた。(略) 修道院学校は，内校と外校という二つの部分に分割されるようになった。内校は，oblati すなわち修道院生活のために差し出され少年たちだけを受け入れた。外校は，修道士にではなく牧師になる予定の少年たちと，世俗生活を送る予定の人びとが通学した。内校も外校も授業料は無料であった。司教の学校もしくは司教座聖堂学校は，修道院学校ほど厳格ではなく，またそれほど繁栄もしなかった。それらは，外面的には類似しており，僧職志願者と俗人の子供たちに一般教育を施こした。生徒たちは，一部は学校の基本財産で費用を負担されたが，俗人の場合ある程度まで，授業料の支払いによった。しかしながら oblati に厳しく要求された修道院生活の厳格な規律を別にすれば，修道院学校と司教座聖堂学校で与えられる教授の間には区別されるべき本質的な事柄は何もない。それは，読み書き，computus つまり算術——これは主に，教会暦を決定するために用いられた——および歌い方も加えた学習から始まった。この基礎教授の上の段階として，多大の骨折りがささげられた文法の学習が行われ，時に，これに修辞学と弁証法が続いたが，最も大きな修道院の場合を除いて，それ以上は，ほとんど，あるいはまったく教授されなかった。聖書の学習も行われたことはいうまでもない。村の学校では，使徒信条，主の祈り，およびおそらく詩篇の断片の学習といった学校教育上重要ではない付加物を別にすれば，基礎的な事柄以外は何も教えられなかった。」(pp. 56-58)

4.　アルクインのこと (3)

①　トゥールの大修道院長 (796年-804年)

790 年，アルクインは「晩年のための真の隠遁所」を求めてヨークに帰った。しかし，諸般の事情は，彼をそこに留まらせなかった。「彼は，792 年にヨークを去って，アーヘンへと向かった。(略) 隠遁への彼の強い希望は，ますます強くなって行き，60 歳を越えると押さえ難いものとなった。」(p. 62) 老師の真剣な求めに応え

てチャールズは，彼を「ロワール河岸に立つトゥールのサン・マルタン修道院（略）の大修道院長に任命した。」(p. 64)

「トゥールの修道僧たちは，彼らの修道請願が命じるほどの厳格さをもって生活していたわけではなかった。それ故にアルクインが第一に留意したことは，これらの修道僧たちをベネディクト修道会の厳しい規律に従わせることであった。(略) しかしアルクインの努力は，修道生活の復活だけに限られなかった。彼の家は，厳格さのセンターとなるだけでなく，学問のセンターともならなければならなかった。（略）彼に残されたわずかな歳月のうちに，彼らの手を通じて学問の伝統を伝えることを十分に期待できるほどに学問に献身的な，またそうできるほどの相当数の生徒たちの一団を育て上げること。(略) トゥール着任の直後，彼は，彼の手始めの仕事を垣間見させる手紙をチャールズに書き送っている。『私こと，かのフラックスは，あなたの熱心な勧告と願望を遂行すべく，聖書の花密なるサン・マルタンの家において，ある種の人びとに対しては，聖職者としての勤めを果たそうと努力しております。古代の学問という古酒で銘酊させようとしている人びともいますが，なおまた，文法上の緻密さというリンゴで育てはじめようとしている者もおります。それに私が，ちょうど画家が教会の円蓋に彼の画像で光彩を添えようとするように，星の理法でその心に光を投じようと努力している人びともいます。また私は，神の聖なる教会のために，またあなたの王国の名誉のために多くのことを教え，全能の神の恩寵が私にあって無駄になっていないことが，またあなたのご親切の寛大さが何らの効果も発揮していなくはないことが理解されますよう，あらゆる人びとにあらゆることを行っています。』と。」(pp. 64-66)

「しかし彼の活動は，最初のうちは，書物の欠如のために困難に陥入った。そこでそのことを王に知らせ，書物を手に入れるために何人かの比較的若い修道僧をヨークに派遣する許可を求めた。（略）この要請の結果としてアルクインがどんな書物をヨークから手に入れたかは，彼自身がそこにいたときに利用したような書物であったことはいうまでもないということ以外は，私たちには知られていない。（略）彼が目指したトゥールでの教授の精神は，(略) 彼の司教区の牧師たちに，厳しい授業料なしの教授を命じたということも注目に値する。」(pp. 67-68)

「修道院規律の厳格な施行と僧侶生活への志願者ならびに俗人の両方に対して学校で授けられる教授に加えて，アルクインは，写字室での手書き本の筆写の監督に忙しかった。（略）私たちはその情景をほぼ復元することができる。祈りの時間と修道院生活の日課の厳守との合間に，アルクインの統括する監督の下での書物の筆写の時間がくる。若い修道僧たちは，写字室に列をなして繰り込む。そして彼らのうちの一人に，ベーダあるいはイシドールあるいはアウグスティヌスの著作か，さもなければラテン語の聖書の中のある部分，あるいは異教の著者さえも含む貴重な羊皮紙の書物が与えられる。彼は，正確に調整された速さで，ゆっくり，はっきり読み上げる。一方，自分たちの机に着席した他の修道僧たちはみな，彼が読み上げる言葉を書き留める。こうしておそらく 20 部の写しが同時に作られる。アルクインの注意深い観察眼は，各人を順番に監視し，誤りを正す手は，正字法と句読法上の誤りを指摘する。（略）こうして学問の保存と伝達に新時代を画する，あの改良を加えられた数々の写本が生み出されたのであった。」(pp. 70-73)

② 忍び寄るアイルランド人学者（いわゆる唯名論者）とアルクインの死

「アルクインの教えと両立しがたい，聞き慣れない見解を持ち込む新しい教師たちが，チャールズの宮廷に現れようとしていた。これらの教師たちとは，ある種のアイルランド人学者たちであり，彼らは，（略）学問の伝統とは異なる教えを（持ち込む者であり），マルティアヌス・カペラの忌むべき本をもたらし，（略）ギリシャ語の本を一緒に持ってきた可能性もある。まさに始まろうとしているのは，伝統と思弁との押さえがたい衝突なのである。アルクインは何度も何度もチャールズに手紙を書いて，（略）（その種の者が）宮廷の若者を盲目にするべくいつの間にか入りこんでしまったことを嘆いている。（略）しかしながらチャールズは，事態をもっと陽気に眺めていた。（略）彼は，チャールズがそれらに耳を傾けたことに大きな驚きを表明し，この最新の邪説が広がって，教会と王自身の国家に混乱が生じないように，信仰の有能な防衛者たちを王のかたわらに呼び寄せるよう熱心に説きすすめている。」(pp. 81-83)

アルクインの死は，804 年のことである。(p. 87)

5. アルクインのこと (4)——学者・教育者としてのアルクインの評価

「アルクインが独創的著作家であることは珍しく，普通には編集者にして翻案家，時には他の人たちの作品の文字通りの転写者でさえあるということをまず最初に述べておこう。（略）彼の神学に関する（略）著作の大半

は，アウグスティヌス，ヒエロニムス，アンブロシウス，および大グレゴリウスの受け売りであるが，一方ベーダは，彼の後期の典拠のうちの第一のものである。しかし彼は，ギリシャ教父たちについては，ラテン語訳を通じて以外は何ら知るところがない。またそれらの訳を彼は，ヘブル人への使徒書簡に関する注釈を作るのに利用するためにクリュソストモスの翻訳に近づく以上には，何ら際立って利用していない。彼の文献資料はすべてラテン語のものであり，ヒエロニムスから写し取られた若干の引用と他の何処かから引かれた時たまのギリシャ語を別にすれば，彼の著作には，いかなるギリシャ語も見い出すことができない。教育の面では彼は，主としてイシドールとベーダに頼っているが，補足的助けをカッシオドルスと，誤ってアウグスティヌスのものとされている論文『範疇について』に借りている。彼はボエティウスについて知っていたが，彼の利用は孫引きによるものだけであった。マルティアヌス・カペラは，言及されさえしていない。

一個の純粋な教育論文として確かな性格を備えたアルクインの論文は，次のものである。すなわち『文法について』『正字法について』『修辞学と徳について』『弁証法について』『ペピンとの論争』それに『De Cursu et Saltu Lunoe ac Bissexto』というタイトルの退屈な天文学関係の論文。その他，次の三つは彼のものとするには確実性の劣るものであるが，『七つの学芸について』『少年たちのための学問的討論』およびいわゆる『アルクインの命題』が，それである。」(pp. 90-92)

『文法』の中でのアルクインの自由学芸への言及に関連して，West は，次のような評価を述べている。「アウグスティヌスは，自由学芸を，聖書の外にあるものではあるが，聖書の理解に役立つものと見た。カッシオドルスは，それら学芸の素晴らしさに関する神秘的暗示を聖書の中に見い出した。そしてアルクインは，それら学芸を聖書自体から手に入れているのである。このような解釈が，世俗的学問の命運にいかに大きな影響力をもつかは，いうに及ぶまい。というのはひとたびそれら学芸が聖書の中に見い出されたら，それらを教会から追い出す方途はまったくなかったからである。」(p. 97)

「アルクインの教師としての名声は，主として『文法』と『正字法』にある。そしてこのことは，それらの子供っぽさにもかかわらず，それらが，彼が書いた他の何にもまして役立ったが故に，まさしくその通りなのである。」(p. 103)

「アルクインの論文を彼の時代状況から切り離して判断しないでいただきたい。彼がその知性に語りかけた当の時代は，思考力といい話し方といい子供のごとくであった。したがって以上とは別の何かを提示するということは，理解できないものを提示するということであった。時代は，学問のためになされるいかなる試みにも，間違いなく失敗をもたらしたにちがいない。誰かが何時か野蛮な西ヨーロッパに近代ヨーロッパ文化の基礎を手ほどきすることは，近代ヨーロッパ文化の進化に必要な第一段階であった。これを行ったのがアルクインであり，しかも彼が，学問が受け入れられる限界を認識していたということは，彼が，凡庸であったよりはむしろ賢明であったことの証拠である。彼は，天才的・独創的・博学の著作家ではなかったが，偉大な実際感覚を備えた人物であった。(略) さいわいなことに彼の教育活動の別の一面が，沢山の彼の書簡の中に現れている。それらは私たちに，彼がまったく無欲で純粋で優しく，生徒たちの精神的幸福に忠節であり，生徒たちの生活と精神が，キリストの心にしたがって形作られるよう，たえず私に心を砕いていることを垣間見させる多くの証拠を与えてくれる。ここにこそ真のアルクインが，朽ち衰えた断片的な学校の教授科目の復興者ということではない，研究と品行の双方に関するキリスト教徒の理想がヨーロッパの顔から消え失せたかに見えた時代にあって，その理想を鼓吹するものとしての，真のアルクインがいる。」(pp. 112-113)

結び　アルクインの後世への影響力

アルクインに始まる「運動の勢力は，時に一個所あるいは数個所に集中したが，別の時期には多くの個所に分散した。学問の主要な流れが，ヨークからトゥールへ，トゥールからフルダへと流れ出たように，その後またそれは明らかにフルダからオセル（フランスの町）に伝わり，フェリエール，新・旧のコルビー，ライヘナウ，サン・ギャル，そしてランスに及び，その一支脈はついにパリに到達する。しかもその流れは，連綿としてという具合にではなく，平行したより小さな流れとそれに連絡した，交差する流れをともなって流れて行く。(略) 彼の死後，(略) チャールズの宮廷学校でさえ，断続的活動経過をたどり始め，まずアルクインからエリウゲナに乗り換え，[6] ついでその他の変化をこうむったが，けっして完全に消滅してしまうことはなかった。(略)

10 世紀の中葉は，教育におけるアルクインの時代と呼ぶことのできるものの限界を画する。というのは，この時点で彼の直接的影響力はしだいに姿を消すからであ

る。(略) しかし 11 世紀の始め，学校はふたび主要な修道院に認めることができる。そこでは，学問の伝統をおそらく前の世紀の人たちからしか受け取ることのできない教師たちが教えていたのである。その間にパリは，ますます首都の性格を呈するようになり，王の固定した居所となった。トゥール，ノルマンディーのベック，およびシャルトルを含む近隣の学校は，以前にもまして密接に，この首都と結ばれるようになり，また知的思索と論争の増大にともなって，教師と生徒は大いに増加した。(略) 新しい教師たちが継起した。こうした教師たちの一人が，ドゥロゴであり，彼の生徒の一人に聾者のジョンがいた。ついで聾者のジョンは，シャトルのロスケリヌスを教え，ロスケリヌスのまわりには，あのはなやかに光輝く弟子たちの群れ，つまりクルニーのピーター，キャンブレイのオド，シャンポーのウイリアムおよびアベラールが群れ集まっていた。今や私たちは，12 世紀の始まりのところにいる。古い事物は廃れ，パリ大学の開始とともに新しいスコラ学の時代が全開する。

アルクインの称賛者たちは，彼をパリ大学の真の祖，またそれによって近代ヨーロッパ大学の真の祖と見なすという並はずれた敬意を，彼に払おうとしてきた。この主張はおそらく，それが反駁されるに先だって述べられる以下のようなもの以上のものである必要はない。教授の面でも外的組織の面でも，そのような結果を生じることになったと思われるような着想を，彼は当然抱いていない。またスコラ学の名の下にヨーロッパに生じた知的覚醒なしに，大学が創立されたであろうといういかなる証拠もないし，あるいは仮に創立されたとしても，大学が事実上なしとげた発展を，この覚醒なしになしえたであろうといういかなる証拠もない。覚醒の推進力は，媒介をなすアラビア語から行われたラテン語訳のギリシャの天才たちの哲学的著作の導入を通じて，外部から生じたのであった。ヨーロッパのほとんど生命を失っていた学問と教育を生き返らせたのは，これらの著作であった。しかしこのことを率直に認めたとしても，なお，アルクインの本来の後継者にして相続人であった司教座聖堂学校や修道院学校が，学生生活の中心であり，教授の伝統の中心であったことは，いぜん真実である。何世代にもわたって設立されてきたこのような中心の存在がなければ，大学が生起したかどうかは疑問である。」(pp. 165-166/pp. 176-178)

註

1) 井上泰男訳『シャルルマーニュの時代 (世界大学選書)』1973，平凡社，pp. 285-7。(J. Boussard, Charlemagne et son temps, 1968, Paris.)

2) ボエティウス (Boethius, 481-525)——「彼の名は，古代哲学の歴史の最後を飾る名前である。キリスト教徒的一面をもった若干の表現と用語を別にすれば，その教養において彼は，異教徒と考えなければならない。教育史上彼が重要なのは，中世全期にわたる広範囲な教科書となった，彼の訳したギリシャ人の諸作品の翻訳書のためである。彼は，算術や幾何に関する論文，アリストテレスの論理学，その他これ以外のアリストテレスの著作やポルフィリオス (訳註・232/3-305頃。ギリシャの哲学者。『アリストテレス範疇論入門 Eisagoge eis tas Aristoteles kategorias』は中世の標準的な論理学教科書となり，普遍は実在か名目かという問題をめぐる〈普遍論争〉の端緒となった——岩波，西洋人名辞典) の著作を翻訳もしくは翻案し，主としてはアリストテレスとキケロに関してであるが，彼自身の手になる注釈書をいくつか書いている。このわずかな知識が，古代ギリシャから中世初期の学校に伝え残されたものの主要部分をなした。(略) 彼の重要性は，彼の著作が，教科書として，また学芸に関する他の著作家の引用のための出典として役立ったという事実にある。しかしながら，どうも彼が，音楽，算術，幾何および天文学を一体化した学の名称として quadrivium (四科) という用語を使った最初の人であるらしいということは，おそらく指摘しておく価値があろう。文法，修辞学および弁証法に対する公式の名称としての trivium (三学) という語も，おそらく彼の時代にまでさかのぼる。いずれにせよ，その後の学問の研究である quadrivium (四科) と対照してみた場合に，言語と語法の初等の学習課程である trivium (三学) 間の本質的な区別立てが，彼の著作に出現する。」(pp. 22-23)

3) カッシオドルス——「ボエティウスの同時代人であり，かつ友人であり，同じく貴族の出であったのが，ローマの元老院議員のカッシオドルス (Cassiodorus, 468-569) であった。(略) 彼は，修道士たちがたゆまず研究に励むよう，とくには写本の書写に励むよう刺激を与えることに努力し，こうしてこの慣習を，ラテン系キリスト教世界の修道生活の秩序の大半を占めるまでに拡大することで，大きな影響を与えた。学問へのこの重要な奉仕のほかに，彼は，キリスト教的テーマのものと世俗的テーマのものの両方について，こつこつと書き続けている。(略) 彼の学芸のリストは，マルティアヌス・カペラに見い出されるものであり，彼は明らかに M. カペラのお陰を蒙っている。しかしこのことを自分では認めていない。マルティアヌスその人のことは，一人の Satura Doctor (サテュラ学者) として，もしくは品位のない雑文集の作者として，軽蔑的態度で言及されているにすぎない。(略) 文法に関する章は，ロー

マの最大の文法家であったドナトスを縮約したものでる。彼の修辞学は，かなりの範囲にわたってキケロに基づいている。彼の弁証法は，一部ヴァロ (Varro, B. C. 116–27——キケロと同時代の学者。彼の『Libri Novem Disciplins rum』の中で，ギリシャからローマに引き渡された学芸を詳細に説明している。pp. 6–7 から引用) に由来するが，主としてボエティウスの受け売りである。それは，まさしく初学生のためにやさしくされたボエティウスである。」(pp. 23–25)

4) イシドール——「自由学芸は，論文もしくは摘要によってずっと後まで保存されることになるが，(略) 次の作家は，最初の百科事典となったものに，それらのための小さな場所を与えている。その作品とは，スペインはセビリアの司教であったイシドール (Insidore, 636 死) のいわゆる『語源』である。野蛮状態のために学問は，彼の時代までにほとんど絶滅状態にある。今日私たちが教父作家や古典作家から収集された膨大な抜粋集を持っているのは，彼の骨折りのお陰である。それは，何世紀もの間，一切の知識の宝庫として役立った。彼の膨大な本が，独創的価値をまったく欠いており，また当時生じていた学問の後退の一指標と見なすことのできるほどの馬鹿ばかしさやたわいなさに満ちていることはいうまでもないが，それでもイシドールが，彼の時代の最も幅広い知識人であったことは確かである。(略) 自由学芸は，彼の本では簡潔に叙述されているが，それらの正しい数は七とはっきり認知されている (略)。それらについての彼の説明は，そっくり，カッシオルドスから写しとられたものである。」(p. 26)

5) マルティアヌス・カペラ——「当初，キリスト教徒の著作家にしばしば承認された(略)カルタゴのマルティアヌス・カペラ(略)は，アウグスティヌスと同時代か，もしくはやや以前の人である。彼は，『言語学とメルクリウスの結婚』と題する寓意的論文を(略)誇張的・空想的な様式で書いている。その本は，したがってその修辞的華麗さにうんざりする代物であるばかりではなく，しばしばきわめて込みいっており，また曖昧なので，私たちは，どの特定の実例にも見られる作者の特異性が，作者の気どった文体のせいなのか解し難い意図のせいなのか，決めるのに途方に暮れてしまう。しかしその論文の目的は，きわめて明瞭である。それは，ヴァロの自由諸学を奇想を凝らした仕方で描述することにあった。マルティアヌス自身は，独学者だったようである。彼は，冬の夜なべとして本を書くことを自分に課し，自由学芸についての彼のとりとめのない，しかし内容豊かな説明にふさわしい文学的容れ物として，散文と韻文とからなる雑文集——これは，散文と韻文とからなる，また『サテュラ』(訳註・Saturarum menippearum libri, 150 巻，B. C. 81–67) として知られているヴァロの雑文集の影響を通じて文学の一つと認められるようになっていたが——を採用したのであった。かくして彼はその本の末尾のところで，比喩的に次のように語っている。すなわち『一つの洗練されない物語の中で，学問的なものと非学問的なものを一緒くたに積み重ねながら，たわいもないおしゃべりをし，聖なるものと俗なるものを一緒くたにし，また学芸を司る女神たちと現実生活の諸方面を司る男神たちの両方をごたごたに集め，そしてまた粗雑な語り口で，諸学の円環を語る」彼の文学の女神 Satura を自分は描いた，と。この「諸学の円環 cyclic disciplines」とは，自由学芸，つまり古典古代のエンキクリウス・ディスキプリナ encyclius disciplina (諸学の円環) のことであり，それが，彼の寓意物語の対話者となっている。」(pp. 18–19)

6) アルクインに，その死の直前に，人目に隠れもないあの不安をひき起こしたアイルランド人の教えは，彼の死後新たな，そして強力な勢いを手にすることになる。814 年チャールズ大帝が死去すると，息子のルイス敬虔王がその後を継いだ。ルイスが死去すると間もなく若い王のチャールズ禿頭王は，845 年頃，ジョン・スコトゥス・エリウゲナを宮廷学校の校長に任命した。(略) 伝統上疑問の余地のない信仰を動揺させるのにぴったりの，危険な思弁的学問の，鋭敏で才気渙発な代表者 (略) ジョンは，禁止されていたマルティアヌス・カペラを携えてやってきて，註解を付けることで，この著作家の影響力を拡大した。ランスのヒンクマールから，彼の筆力で正統派の信仰を助けにくるよう哀訴された時，ジョンは，聖書とならんで引用されるにふさわしい権威として，ラテン教父と同様にギリシャ教父を，また都合のいい場合にはいつでも異教の哲学者でさえ，引用することをためらわなかった。(略) 思弁と伝統の間に論争が始まり，この論争をアルクインが是認しようとした範囲内に閉じ込めることは，もはや不可能となった。エリウゲナの教えに発する新しい影響力は，最初は抵抗を受けたものの，後に次第に修道院で与えられる古い教えと混じり合うようになっていった。」(pp. 166–167)